

英国における精神科卒後教育と専門医制度

北 村 俊 則

精 神 医 学

第23巻 第12号 別刷

1981年12月15日 発行

医学書院

資料

英国における精神科卒後教育と専門医制度*

北村 俊 則**

I. はじめに

精神科にかぎらず医学における英国の卒後教育は他の国々に比較してととのったものであり、事実多くの国から若い医師が研修を受けるため、ロンドンをはじめ英国の各都市に集まっている。

表題のテーマについては以前に紹介^{1,2)}があるので、ここでは新しく発足した制度に重点を置き筆者の体験をまじえて略述したいと思う。

II. The Royal College of Psychiatrists とその会員試験³⁾

以前 The Royal Medico-Psychological Association (RMPA) と呼称されていたものが、1971年に新しく The Royal College of Psychiatrists (ここでは Royal College と略記したい。英国の精神科医の間ではそうよぶことが多い。)として再発足し、それまでは精神医学に興味のある有志の集合体であったものが専門医の団体としての体裁をととのえたのである。Royal College の目的は、①精神医学の基礎と臨床の進歩、②卒後教育の充実、③研究活動の振興とその結果を出版して発表するという点である。卒後教育については Royal College の会員試験により、研究活動については British Journal of Psychiatry を出版することなどにより、英国精神医学の流れを方向づけているようにみられるのである。

注目に値するのは Royal College のなかに spe-

cialist section または specialist group という分科会を作り、専門の細分化が行なわれていることであろう。ちなみにこの分科会には Mental Deficiency, Psychotherapy, Child and Adolescent Psychiatry, Forensic Psychiatry, Psychiatry of Old Age, Social and Community Psychiatry があり、ごく最近 Biological Psychiatry が追加された。

なお Royal College の活動については、毎号の British Journal of Psychiatry に添加されている The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists に詳しく報告されている。

Royal College の会員資格は Membership of the Royal College of Psychiatrists (略して M. R. C. Psych.) と呼ばれ、Royal College の前身団体であった RMPA の旧会員以外はすべて試験制度を適用して会員の資格を得るようになった。この会員資格がないと現在の英国では精神科専門医としては認められない。後にも述べるが、精神科病棟に勤務はしているが資格のない若手医師はすべて trainee として一括される。専門医と trainee は英国社会においては、社会的評価も、年俸も、仕事の安定性 (例えば Registrar の雇用契約は普通3年であるが、Consultant は終身) も明瞭な差があるので若手医師は M. R. C. Psych. 取得に全力を投入するのである。

会員試験は Preliminary Test と Membership Examination の二部に分かれている。Preliminary Test は Royal College の認定をうけた病院⁴⁾ (および大学、研究施設) における最低1ヵ年間の臨床経験を経たものに受験資格が与えられる。試験形式は午前中2時間の300題の multiple choice question (M. C. Q.)、午後2時間の essay paper (essay は5題中1題選択) より成り、試験内容は

1981年3月20日受理

* Psychiatric Postgraduate Training and Specialist Qualification in the U. K.

** 慶応義塾大学医学部精神神経科学教室, Toshinori Kitamura: Department of Neuropsychiatry, School of Medicine, Keio Gijuku University

精神科に関連の強い諸科学及び精神病理学ということになっている。試験場は通常 London, Birmingham, Edinburgh, 及び Dublin の 4 ヵ所である。合格率は約 4 割である。

Membership Examination では, Preliminary Test に合格した者で, Royal College の認定した病院で最低 3 年間の臨床経験を経たものに受験資格が与えられる。試験は 2 日にわたって行なわれる。試験内容はすべて臨床精神医学である。第一日は筆記式で, Preliminary Test と同じく, 午前中 2 時間の 300 題の M. C. Q., 午後 3 時間の essay paper より成る。第二日は口頭式で, 15 分間の Viva と, 1 時間 30 分の clinical より成っている。Viva では 2 名の試験官より臨床精神医学のすべての分野について矢つぎばやに質問を受けることになる。clinical では, 実際の患者の診察を 1 時間かけて行ない, それに引き続いて, 2 名の試験官が受験者にその症例について, 病歴のまとめ, 精神的現在症, 鑑別診断, 検査項目, 治療方針, 予後などについて具体的に質問してゆく。この 2 日間の最終試験を通過できる人は受験者の約 5 割で, 筆者の知人にも過去 4~5 回にわたって挑戦したがいずれも失敗におわった人が少なからずいた。

上記のように Royal College は定期的に委員を全国の病院に派遣し, その病院が教育病院として適切であるかどうかを決めている。この評定の一覧表は簡単に入手できる。たとえ教育病院に認定されても, 次の審査で認定からはずされるという「スキャンダル」も少なからず耳にした。

Preliminary Test に必要な精神科における一年間の経験は外国 (例えば日本) におけるものでも許可されることがある。

Preliminary Test, Membership Examination とともに過去に出題された問題集があり, これも Royal College より入手できる^{5,6)}。

Membership Examination の口頭試験の試験官は Royal College の会員より選ばれ, 各試験場の地域の会員と, それ以外の地域からの会員が混ざるようになっていて, かつ毎年 2 回 (通常 3~5 月と 9~11 月) の試験で試験官の顔ぶれが変わるように配慮されている。Membership Examination

で最も重要なのは clinical である。こまかい配点方法は公開されていないが, 他の 3 部門にいかにか優秀な点を取っても clinical が合格点に達していない場合は, 最終結果が落第になる。

Membership Examination の essay paper に代替できるものとして research option がある。これは前述の Royal College の目的のひとつ, 研究活動の振興の一部として作られた。受験者が supervisor の指導のもとに臨床研究を行ない, その結果を dissertation (5,000~10,000 語) として提出し, もしそれが一定の学問的水準を越えていると判断された時に essay paper を免除される制度である。筆者もこの option をとったのであるが, Royal College の話しでは, この research option はあまり人気がなく, 1 年に数件しか提出されないとのことであった。

その他の資格について一言述べておきたい。すでに紹介があったように, M. R. C. Psych. の発足以前より Diploma in Psychological Medicine (D. P. M.) がある。これは 3 回の試験からなり, Part A は行動科学, Part B は医学一般と神経学, Part C が精神医学である。2 年間の精神科臨床経験が受験に必要とされる。この資格は比較的に身体医学的側面が重視され, Part C (精神医学) の水準は M. R. C. Psych. の Membership Examination より低いと言われており, 専門医資格としては M. R. C. Psych. に取ってかわられた感があり, 事実 D. P. M. を早晩廃止するのが Royal College の意向であるときている。

このほかに大学より授与される資格として M. Phil. がある。これは学問上の資格であり, 臨床上の専門医資格とは区別されている。このことは前述の試験内容から推して御理解いただけと思う。

ちなみに Preliminary Test, Membership Examination それぞれにおいて毎回の受験者は 200~300 名ほどである。1977 年の名簿によると, 正会員は 4,000~5,000 名である。

III. 医師の病院内での地位と専門医資格との関係

英国の病棟内の medical staff の階級⁷⁾は, いか

にも英国の保守的側面が表われていて、こまかく分かれている。下から、Senior House Officer, Registrar, Senior Registrar, Medical Assistant, Consultant である。Senior House Officer と Registrar は junior staff と呼ばれ、後 3 者は senior staff と呼ばれる。また Senior House Officer より Senior Registrar までが trainee に含まれる。医療上の全責任は Consultant が負っている。

地域により、場合により異なると思うが、雇用契約期間は Senior House Officer が 1 年、Registrar が 3 年、Senior Registrar が 6 年、そして Consultant が終身というのが一般的である。

そこで、多少図式的に述べると、trainee 達はまず Senior House Officer を 1 年間経験したあと M. R. C. Psych. の Preliminary Test に挑戦する。これに合格した後 Registrar の職を得ることが出来る。英国のすべての医療職 (private practice を除く) は公募制であり、必ず British Medical Journal 及び Lancet に募集公告が掲載される。英国の若手医師が British Medical Journal を毎週通読するのはこのためでもある。Preliminary Test の合格は Registrar の地位獲得のための必須条件ではない。しかし評判の良い教育病院の空席への応募者の競争率は高く、合格者は数段有利である。さて 3 年間の Registrar 勤務の期間後半に Membership Examination を受験し、合格した場合は、Senior Registrar の空席を待つのである。現在 M. R. C. Psych. の取得は Senior Registrar 応募の必須条件といってさしつかえない。Senior Registrar 期間中に種々の精神科内部での specialist としての訓練を受けながら、あるいは臨床研究を行ないながら、彼らは条件のよい Consultant の空きを待つのである。

Medical Assistant は Senior Registrar と Consultant の中間とはなっているが、多くの場合は女性の専門医や、専門医資格を持っている家庭医 (General Practitioner) がパートで病院勤務する場合、あるいは外国からの研究者に与えられる。Medical Assistant は当直からはずさされている。Senior Registrar は Medical Assistant を經由することなく Consultant 職に応募するのである。

なお蛇足になるが、教授、講師などの肩書きは

大学職員に与えられるものである。しかし大学に附属の病院がある場合 (そのことが多いのだが) には病院の職分として前述の medical staff の階級が存在するのであり、大学職員が病院職員を兼務する形式をとっている。そして大ざっぱに言って、Lecturer—Senior Registrar, Senior Lecturer—Consultant, Professor—上級 Consultant (Medical Director など) という対比を作れると思われる。筆者が所属していた Birmingham 大学では教授～講師が有給、ほかに clinical psychologist 2 名と laboratory technician 1 名が有給で、有給者は 10 名に満たない小世帯であったが、これは London を除いた他のどの大学でもだいたい同じ傾向にあると思われる。では無給の大学研究者はどうするのかということ、各種の短期あるいは長期の研究資金、奨学金を持っているのである。英国内の奨学金については良い手引書⁸⁾があるので参照されたい。

医療職公募制についてさらに付言すると、良いポストにつくにはその科における専門医資格に加えて、専門以外の科についての専門医資格があればなお有利である。精神科 Consultant で M. R. C. Psych. 以外に M. R. C. P. (内科) や M. R. C. O. G. (産婦人科) の肩書きを持っている人は少ない。M. Phil. などの大学の資格も有効である。研究業績も当然有効である。そのため最終目標として精神科医を目指してはいても、卒業後は内科、外科、産婦人科などで数年を費し、そこでの専門医資格を取る人も多いのである。

IV. 精神科卒後教育

以上のことから卒後教育は M. R. C. Psych. 取得に目的が向けられていることが理解できる。若手医師が専門医資格をとるために「何を」「どうやって」勉強するのかについて以下に述べる。

Royal College が過去の問題集を発表していることはすでに述べたとおりである。さらに Royal College では Reading List⁹⁾ を発表している。数年ごとに新版を改訂発表しているが、筆者は第 4 版を利用した。これは trainee 必読の約 500 篇の論文、総論、それにペーパーバックのような単行本からなる一覧表で、項目別 (表 1) に配列され

表 1 Reading List の項目

Chromosomal abnormalities	Sexual problems
Psychiatric aspects of neurological disease	Pregnancy, abortion, and puerperium
Psychiatric aspects of systemic disease	Miscellaneous clinical syndromes
Head injuries	Miscellaneous clinical studies
Memory impairment	Hospitals
Epilepsy	Policy, planning and services
Presenile dementia	Diagnosis and classification
The psychiatry of old age	Concept and role of mental illness
Schizophrenia (Genetics, Psychogenesis, General clinical, Thought disorder, Physiology and biochemistry, Epidemiology and social factors, Treatment)	General practice studies
Affective disorders (Genetics, Classification, General clinical, Physiology and biochemistry, Treatment, Grief and bereavement)	Transcultural psychiatry
Suicide and parasuicide	General
Anxiety and phobia	History of psychiatry
Hysteria	Psychotherapy and psychoanalysis (Psychoanalysis, Psychotherapies, Crisis intervention, Family and marital therapy, Group psychotherapy, Research on psychotherapy)
Obsessional illness	Behaviour therapy
Personality disorders	Child and adolescent psychiatry (Child development, Epidemiology, Diagnosis and classification, Emotional disorders, Enuresis, Encopresis and psychosomatic relationships, Developmental disorders and organic factors, Psychoses, Adolescent disorders, Aspects of treatment, Follow-up and prognosis)
Alcoholism (General, Clinical studies, Treatment, prevention and prognosis)	Mental deficiency (Epidemiology, Aetiology and pathology, Prevention, Psychiatric aspects, Psychological assessment, Miscellaneous disorders, Social aspects and services, Treatment)
Drug abuse (General studies, Individual drugs, Drugs and pregnancy, Smoking)	
Forensic psychiatry	
Psychosomatic disorders	
Hypochondriasis	
Anorexia nervosa	

ている。その項目からわかるように、これは Membership Examination 用のものであり、臨床精神医学の広い範囲にわたっている。現在最新版が製作中である。

Royal College に登録した trainee を inceptor と呼ぶが、inceptor のための手引き書³⁾が出版されている。さらに the British Journal of Psychiatry Special Publications と称し、教育用の総説集を色々な主題ごとに整理して出版(現在までに 10 数冊)されている。これは英国では教育病院の図書室にたいてい揃っている。また British Journal of Psychiatry の中にも Reading about...や Comments などの教育用の欄が近年もうけられている。

British Journal of Hospital Medicine も価値ある総説を多くもりこんだ雑誌で、若手医師の間で人気が高い。

各地の大学医学部では専門医養成のための教育コースがあり、精神科もその例外ではない。Bir-

mingham での状況を述べると、これは 3 年間でひと区切りのコースであり、週 1 日、年 27 回で、大学の精神科教室が運営している。第 1 年は火曜日、第 2 年は水曜日、第 3 年は木曜日と分散し、同じ病院から出席している Senior House Officer と Registrar が同じ曜日に病院を空けないよう配慮されている。

第 1 年は M. R. C. Psych. Preliminary Test 及び D. P. M. Part A 受験者用で精神医学に関連のある基礎学科が含まれている(表 2)。第 2 年は M. R. C. Psych. Membership Examination 及び D. P. M. Part C 受験者用で臨床精神医学一般(表 3)。そして第 3 年は精神科内部の specialist 教育用で、受験者も、資格をすでに取得した Senior Registrar なども出席できるようになっている(表 4)。

こういった大学主催の週 1 日のコース (day-release course という) はだいたいどこでも同じ形態であるようで、病院勤務の trainee がこれに参

表 2 M. R. C. Psych. Course 第 1 年

Psychology/Child development
Phenomenology
Neurophysiology
Neuroanatomy
Interview techniques
Statistics
Genetics
Neurology
Neuroradiology
Psychiatry related to general medicine
Neuropathology
Nosology
Sociology
Neurochemistry/Neuropharmacology
Psychodynamics
Mental mechanism
E. E. G.
Ethology

加する日数は study leave と称し、有給となっている。普通 study leave は 1 年間に 30 日までが限度である。

特訓用つめこみコースも各地で随時行なわれている。毎週の British Medical Journal や Lancet の classified add に載っているのがそれで、筆者も Preliminary Test 用の Oxford のコースと Membership Examination 用の Guildford のコースに参加した。

Oxford のコースは Oxford 大学が世話役になり夏休みで大学生のいない大学構内で催された 1 週間のコースで、neuroscience に焦点をあて講義と脳解剖の実習を通じて中枢神経系の形態と機能について再教育するに大変役に立った。Guildford の University of Surrey で行なわれたコースは、St. George's Hospital が後援し、やはり夏休み中に Membership Examination に向けて行なわれたものである。8 日間を費し、途中の土、日曜日も休まず朝 9 時より夕刻 7 時までの英国にしては考えられないくらいのつめ込み教育で、夜の自由時間でさえも熱心な受講者達は自主的に勉強会を催して、お互いに不明な点を質問しあったりしていた。M. R. C. Psych. の試験合格率は英国人では高く、海外からの若手医師では極端に低い数字を示している。そのためこういった試験直前のつめ込み教育講座の大部分の受講生は海外から

表 3 M. R. C. Psych. Course 第 2 年

History of psychiatry
Ethics of psychiatry
Psychotherapy
Use of the library
Psychosurgery
Basic psychopharmacology
Hypnosis
Organic psychiatry
Social work method
Biofeedback
Social psychiatry
Family psychiatry
Psychosexual problems
Behaviour modification
Psychosomatic medicine
Neuroses
Community psychiatry
Applied psychopharmacology
Schizophrenia
Social services
Mental health legislation
E. E. G.
Epilepsy
Psychogeriatrics
Research methodology
Therapeutic communities
Affective psychoses
Paranoid states
Alcoholism
Drug addiction

表 4 M. R. C. Psych. Course 第 3 年

Child and adolescent psychiatry
Mental deficiency
Forensic psychiatry

の医師であった。

専門医になるため訓練中の trainee 達が自主的団体を作り Association of Psychiatrists in Training (A. P. I. T.) と命名し、活動を開始したのはごく最近のことであるが、Royal College に対する影響は少なからぬものがあり、trainee の正式代表者を Royal College に送るようになり、今までの試験制度を批判し、より良い方法を求めたりしている。この A. P. I. T. が年 2 回自主的な試験対策講座を開いている。これはごく数日の短いものであるが、即実戦に向く助言や情報ばかりなので人気が高い。

大学病院の Registrar や Senior Registrar は rotation scheme¹⁰⁾に乗ることが出来る。Birmingham を例にとると 3 年間のうちに Queen Elizabeth Hospital (大学病院), Midland Nerve Hospital (大学別院で主に神経症, 神経性無食欲症, 軽症うつ病など), Uffculme Clinic (精神療法専門施設), Charles Burns Clinic (小児精神医学専門施設), All Saints' Hospital (単科精神病院), All Saints' Hospital の中にある Addiction Unit (アルコール及び薬物中毒治療施設で, かつ West Midlands の centre でもある) や Midland Centre for Forensic Psychiatry (司法精神医学) さらには Birmingham General Hospital (一般病院の中での精神科) を rotate するのである。こういう各種の施設を rotate できるポストは教育病院のポストとして高い評価と人気をうけ応募率も高い。

Reading List についてはすでに述べたが, すべての受験生がこれに載っている論文を通読しているわけではない。第 5 版の Reading List では論文数がさらに倍増するということなので, そうなったらたとえ母国語でも読みこなせるものではない。Reading List のうちどれが必読な論文かがわかる List が必要だ, と皮肉られている。では受験生は何を読むのか。Membership Examination 受験者は Anderson Trethowan のような小教科書を読み, 次には Companion to Psychiatric Studies¹¹⁾を読む。これは精神医学の各トピックについて一線の研究者が書きおこした総説集である。同じような趣旨の本で Recent Advances in Clinical Psychiatry があり, 第 3 版まで出版されている。Mayer-Gross の有名な教科書は残念ながらほとんど読まれていない。

しかしながら, 合格するためには極力多くの文献に目を通さなければならない。事実受験生達はよく読んでいる。教科書的なことでは補えない最近の知見 (そしてこれがよく口頭試験で尋ねられるのであるが) については British Journal of Psychiatry, British Medical Journal, そして British Journal of Hospital Medicine などを流し読みして up to date な常識を身につけるよう努力している。ちなみに筆者の受けた Viva でも, 試験日の前日に発表された British Journal of Psychiatry

の論文のひとつについて質問を受けた。

英国精神医学のひとつの特徴として文献主義をあげることができるかもしれない。口頭試験でも essay paper でも, 自分の意見に加えて, 文献的裏付けがあれば強力である。著者名, 年次, そして発表雑誌名まで挙げれば合格まちがいなしである。

V. 生涯教育と会員試験制度への批判

M. R. C. Psych. 合格は若手医師にとっては安全かつ豊かな生活が一生保障されたも同じで, あせらずともやがては Senior Registrar を経由して Consultant になることが出来る。合格者はパーティを自主的に催し, Royal College の紋章 (British Journal of Psychiatry の表紙をかざっているデザイン) の織りこまれたネクタイや, さらには Royal College の紋章の楯を買いこみ勝利を祝すのである。そのあとの専門医教育は, 残念ながらそのほとんどが個人の意志と努力に任されるのである。

しかしながら, 資格取得後の教育の場としては次のようなものがある。前述のように, Senior Registrar としての精神科内部での特殊部門への rotation, そして個人の興味の対象が明確であれば, その部分で腰を据えて Senior Registrar として勤務することは可能である。

定期的ないし単発の教育講座は各地で開催され, さらに Royal College の中の specialist section の会合に出席したり, ここで研究発表を行なうことも大変教育的である。これらの情報は The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists の Forthcoming Events の欄に必ず公告されている。Research Methodology に関するコース¹²⁾が毎年各大学の廻り持ちで開催されているのは良い例で, これは臨床家にとって臨床研究における方法論についての最適の入門講座となっている。

すでに述べたような research fund をさがして, Research Registrar または Research Senior Registrar として数年臨床研究に没頭することも可能である。

一般の National Health Service¹³⁾の病院の Senior Registrar になるかわりに大学の Lecturer 職

を求めてもよい。この場合は重点は教育と研究におかれる。Lecturer を経て再び病院の Consultant として臨床に復帰してもよく、あるいは大学に残り Senior Lecturer から Professor をねらってもよい。

このように M. R. C. Psych. 取得後の教育も多くの道があるのだが（試験のような）外からの制約、圧力がないため、何も勉強しなくなってしまうケースも稀ではない。

これに加えて、他にも M. R. C. Psych. 試験に対する批判は多い。

Preliminary Test については、心理学での Eysenck 的行動主義の影響が強すぎるという批判や、あるいは essay paper を排して M. C. Q. のみで Preliminary Test を行なった方が合理的であるという意見も出ている¹⁴⁾。

Membership Examination についても、clinical で要請される formulation (与えられた症例のまとめ) をどう書くかについて教育者によってまちまちである。業績や試験資格に重点が移動し、患者本位の医療がなおざりにされているといった批判がある¹⁵⁾。

より良い試験方法の開発を受験者達は望んでいる¹⁶⁾。

VI. 英国における外国人若手医師

英国の医師のうち外国人が3割も占めているといわれている¹⁷⁾。この率は精神科においては4～5割に上昇し、教育病院より非教育病院において高率である¹⁸⁾。M. R. C. Psych. や D. P. M. の合格率も英国人受験者よりかなり低く、志を抱いて英国には来たものの頻回の受験にもかかわらず専門医資格がとれず途方にくれている外国人若手(中年も多いが)医師は少なくない。自国内で医師を補充すべきという意見も強いが、同時に外国からの若手を英国でこそ訓練すべきだという意見¹⁹⁾も今だに根強く続いている。

最後に、これから渡英予定の方のための実際の助言を列記して稿を終えたい。

(1) あらかじめ働らく病院と密な連絡をとる。身分、給与、勤務期間なども明らかにしておく。関連文書・手紙は必ず保管し、自分から相手に出

す手紙はコピーをとっておく。

(2) 入国時にとるべき外国人医師の入国資格試験 (P. L. A. B.) について General Medical Council (手紙は The Registrar, Overseas Registration Division, General Medical Council, 25, Gosfield Street, London W1P 8BP U. K. へ) に問い合わせる。上記入国手続は英国外では行なえないので注意すること。

(3) 渡英前に英語力の向上をはかる。渡英しからの語学研修は決して早道ではない。大ざっぱにいうと、Cambridge Proficiency in English Test (日本では International Language Centre で応募できる) 合格なら臨床で通用するが、不合格では不安が残る。

文 献

- 1) 阿部和彦：外国における精神科専門医制度とその実態—イギリス篇。精神医学, 11; 833, 1969.
- 2) 石川義博：イギリス (懸田克躬, 大熊輝雄, 小此木啓吾, 宮本忠雄, 安永浩編) 現代精神医学大系 1A 精神医学総論 I, 中山書店, 東京, 224, 1979.
- 3) Bewley, T.: Handbook for Inceptors and Trainees in Psychiatry, Educational Committee of the Royal College of Psychiatrists, 1976.
- 4) The Royal College of Psychiatrists: Approval of Hospitals and Units for General Professional Training in Psychiatry, The Royal College of Psychiatrists, 1975.
- 5) The Royal College of Psychiatrists: A sample preliminary test multiple choice question paper. News and Notes, Suppl. to Br. J. Psychiat., 7, August, 1974.
- 6) The Royal College of Psychiatrists: Essay Question Papers 1971-1975, The Royal College of Psychiatrists.
- 7) Parkinson, J.: A Manual of English for the Overseas Doctor, Churchill Livingstone, Edinburgh, 1976.
- 8) British Medical Association Board of Science and Education: Research Fund Guide (3rd edition), British Medical Association, London, 1976.
- 9) Kendell, R. E. and Smith, A. C.: Reading List in Psychiatry (4th edition), The Royal College of Psychiatrists, London, 1977.
- 10) Bronks, I. G., Parry-Jones, W. and Wallen, G. D. P.: Rotational Training Scheme in Psychiatry. The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists, December, 190, 1979.
- 11) Forrest, A. D., Affleck, J. W. and Zealley, A. K. (ed.): Companion to Psychiatric Studies (2nd

- ed), Churchill Livingstone, Edingburgh, 1978.
- 12) Brockington, I.F.: Research Committee: A course on research methodology and statistics. The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists, April, 65, 1978.
 - 13) 篠崎英夫: 英国の医療—Reorganization を中心に, その歴史と現状. 公衆衛生情報, 34, 1975.
 - 14) Hassall, C. and Trethowan, W.H.: Multiple choice examinations: Their predictive value in the Preliminary Test and the Membership Examination. The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists, June, 101, 1978.
 - 15) Westheimer, I.J.: Senior Registrar training. The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists, December, 206, 1980.
 - 16) Trotter, C. and Hughes, G.: The MRC Psych Examination—Consumer survey, The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists, January, 8, 1981.
 - 17) Clare, A.: Psychiatry in dissent. Controversial issues in thought and practice. Tavistock Publication, London, 1976.
 - 18) Cox, J.L.: Overseas psychiatrists in Scotland. The Bulletin of the Royal College of Psychiatrists, April, 72, 1979.
 - 19) Leff, J.: Overseas trainees in psychiatry. Brit. J. Psychiat., 137; 288, 1980.